

eスクール ステップアップ・キャンプ 2024 神戸大会

報告（1）

園田学園女子大学教授 堀 田 博 史

1 大会概要

（一財）日本視聴覚教育協会・日本視聴覚教具連合会主催、文部科学省・神戸市教育委員会共催「eスクール ステップアップ・キャンプ 2024 神戸大会」が、2024年11月22日（金）・23日（土・祝）の2日間、神戸市立なぎさ小学校を会場に開催された（写真1）。

大会テーマを「未来を切り拓くーNEXT GIGA時代の学びを探る」とし、対面で開催された。会場には約420名の参加者のもと盛大に行われた（写真2）。今年度は、第73回近畿放送教育研究大会・

第74回近畿学校視聴覚教育研究大会（兵庫大会）と同時開催として行われた。

本誌面では、11月23日（土・祝）に行われたプログラムについて、2回にわたり報告する。

午前10時から開会式が行われ、主催者を代表して日本視聴覚教育協会 大久保昇会長からは、eスクールステップ・キャンプは、全国から参集した学校関係者がICT活用事例を幅広く共有し、同時に展示される最新のICT環境を体験できることが特徴である。明日からの授業に役立つ情報を収集していただきたいと祝福のお言葉をいただいた（写真3）。

開催地・神戸市 福本靖教育長からは、NEXT GIGAでの情報端末の選定時期に入っている。コロナ禍では、1人1台の情報端末が児童生徒に配布され、教師がその活用に懸命に追いつこうと努力した。今後は、紙とデジタルを融合させながら最適な学習環境を構築することに期待するとご挨拶いただいた（写真3）。

その後、基調講演では、文部科学省初等中等教育局学校情報基盤・教材課 寺島史朗課長による「GIGAスクール構想が拓く教育の未来」と題した



写真1・神戸市立なぎさ小学校



写真2・開会式



写真3・大久保会長（左）・福本教育長（右）



写真4・情報モラル教育指導者セミナー



写真5・神戸市教育委員会主催「KOBEXGIGAフェス」

お話しがあった。

午前中に、文部科学省委託「(情報モラル教育推進事業) 情報モラル教育指導者セミナー」が、(株)NTTExCパートナーの協力のもと、常葉大学 酒井郷平准教授のご指導と授業実践者として、東京都大田区立東糀谷小学校 眞保 篤教諭、東京都世田谷区立上祖師谷中学校 池田達哉教諭、静岡県立浜松江之島高等学校 可知穂高教諭から発表があった(写真4)。

また、併行して神戸市教育委員会主催「KOBEXGIGAフェス」が開催された。学校の2階部分を活用して、小学生と保護者250組の事前申し込みがあり、ドローンの操縦をはじめ、高校生が小学生をサポートするプログラミング教室、学校で活用されているアプリの紹介など、熱気あふれる体験を共有することができた(写真5)。

その後のデジタルポスターセッションでは、神戸市小学校教育実践研修 ICT教育グループ 神戸市立池田小学校 藤本 涉教諭・神戸市立乙木小学校 増田優介教諭、神戸市中学校教育実践研修音楽グループ 神戸市立高取台中学校 愛宕力也主幹教諭、神戸市立神戸工科高等学校 恒松良太教諭、滋賀県彦根市教育委員会学校ICT推進課 北川尚樹課長、神戸市立長田南小学校 中根一弥主幹教諭、神戸市立渚中学校 福田遥平教諭、神戸市立灘さくら支援学校 佐和将圭教諭、愛媛県四国中央市教育委員会教育指導部学校政策課 馬越博之課長補佐、神戸市立山田小学校 柘植裕貴教諭、大阪市立住吉小学校 田原健之介教頭、大阪府立すなわ高等支援学校 沼丸侑磨教諭、兵庫教育大学附属小学校 林 孝茂教諭から、興味深い発表をいただいた。



写真6・教育ICT教材・機材展示

締めくくりのパネルディスカッションでは、教育長鼎談「GIGA スクール構想の現状とNEXT GIGA について」と題して、文部科学省初等中等教育局学校情報基盤・教材課 寺島史朗課長、神戸市教育委員会 福本靖教育長、徳島県教育委員会 中川斉史教育長、大阪府箕面市教育委員会 藤迫稔教育長らにご登壇いただき「GIGAスクール構想の今とこれから」をテーマに議論された。

多くの企業にご賛同をいただき、教育ICT教材・機材の出展を得た(写真6)。

(株)内田洋行、エプソン販売(株)、JR四国ソリューション(株)、Sky(株)、ソフトバンクロボティックス(株)、テクノホライゾン(株)、TOPPANホールディングス(株)、光村図書(株)、理想科学工業(株)、HDL(同)、(株)近畿エデュケーションセンター、シャープマーケティングジャパン(株)、スズキ教育ソフト(株)、Dynabook(株)、東京書籍(株)、(株)Mikulak、(株)MetaMojiの17社により、最新型の電子黒板、プログラミング教育、統合型校務支援システムや教育クラウドサービスなど多くの有用な情報をご提供いただいた。

2 基調講演

「GIGAスクール構想が拓く教育の未来」

文部科学省初等中等教育局学校情報基盤・教材課
寺島史朗課長

まず、人口減少・少子高齢化、グローバル・社会の急速なデジタル化、そして人生100年時代など、教育を取り巻く環境の変化の説明があった(写真7)。

続いて、「GIGAスクール構想の成果と課題」と題して、成果として1人1台情報端末の整備が1、2年で完了したこと、誰一人取り残されない学びの保障が行われ、インフラ整備がされたことを挙げられた。一方、課題として、地域・学校間で大きな活用格差が生まれたこと、端末の更新、学校ネットワークの改善、さらに校務DXの推進に直面していると述べられた(写真8)。

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けてのテーマでは、授業、家庭での利用とともにICT活用が進んできているデータを示された。さらに、ICTの活用頻度と各教科の平均正答率に



写真7・寺島課長

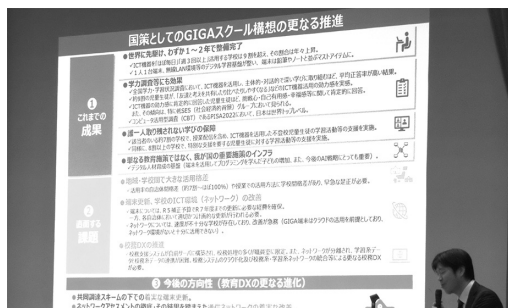


写真8・寺島課長の発表スライドより

は相関は見られないものの、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を進め、課題の解決に取り組む学習活動を行っている学校ほど、そのような学習場面でのICT機器の活用頻度が高いと回答していると説明があった。

次に、全国に250校程度あるリーディングDXスクールの事例を紹介された。Webサイトには約1,500事例(動画36事例)が掲載されており、その中からクラウド環境を活用し、児童生徒の情報活用能力育成を図った好事例を紹介された。約9割の児童生徒が、ICT機器は「分からないことがあった時に、すぐ調べることができる」「画像や動画、音声等を活用することで、学習内容がよく分かる」「友達と考えを共有したり比べたりしやすくなる」と考えていると、令和6年度全国学力・学習状況調査の結果より述べられた。

「改めて、なぜGIGAスクールなのか」のテーマでは、教室の中の児童生徒の多様性の中で、これまで通り、誰一人取り残さない授業は可能なのか？考え、デジタル学習基盤を土台とした学びの必要性を語られた。

最後に、初等中等教育段階における生成AIの利用に関する暫定的なガイドラインの改訂の議論として、まずパイロット校での実践事例が数多く上がってきており、学習意欲や創造性が低下すると懸念されていたが、そのような感触を持った学校関係者はほとんどいない。生成AI登場以降も、教師の重要性は変わらず、児童生徒一人一人の学びを最大限に引き出し、主体的な学びを支援する伴走者としての役割が一層求められると締めくくられた。

3 デジタルポスターセッション1

セッションの持ち時間は15分間、その中で発表と活発な議論が、計12件行われた。

本稿では前半6件の発表を紹介する(本報告に続き、発表要旨も掲載)。

以下の報告は、配布資料より抜粋、編集したものである。



写真9・神戸市小学校教育実践研修 ICT教育グループの発表



写真10・神戸市中学校教育実践研修 音楽グループの発表

①「教育実践研修ICT教育グループの端末活用促進の取組」

神戸市小学校教育実践研修 ICT教育グループ

神戸市立池田小学校 藤本 渉教諭

神戸市立乙木小学校 増田優介教諭

本ICT教育グループは、授業力向上のための実践的な研修として、教科・教科外合わせて21グループに分けられた中で、GIGA端末を活用した授業を研究・推進している立場にある。「ICTを活用した個別最適な学び、協働的な学び」に注目した授業研究を進めてきた。また、1年生から6年生、そして中学校へとつながるように系統立てたプログラミング的思考を育む授業研究を行った事例を紹介された（写真9）（発表要旨11頁）。

②『「SKYMENU」の活用 一個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実をめざして」

神戸市中学校教育実践研修 音楽グループ

神戸市立高取台中学校 愛宕力也主幹教諭

本音楽グループは、神戸市立中学校の音楽科教員によって組織され、授業やその評価方法、ICTの活用などの研究を進めている。

「育もう創造性広げよう世界～思いをもち・感じ合い・音楽を楽しむ学びの過程を通して～」というテーマのもと、ポピュラー音楽の鑑賞の授業についての授業づくりをチームで行っている。

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図るための手立ての工夫として、SKYMENUの発表ノートに鑑賞音源を添付しワークシートを配布したり、協働的な学びにむけてイヤホンスブリッターを活用した事例を紹介された（写真10）（発表要旨12頁）。



写真11・神戸市立神戸工科高等学校の発表

③「ロボットアーム教材の製作とプログラミング教室の実施」

神戸市立神戸工科高等学校 恒松良太教諭

神戸工科高校は、4年制の定時制課程をもつ工業高校で、2年次から、機械、電気、ロボティクスの3つのコースに分かれ、令和4年度には「産業用ロボットアーム」を含む多目的学習システムを取り入れた。3Dプリンターでパーツを印刷し、ロボット教材の製作・量産を実習で行ったり、工業情報数理の授業では、実習で製作したロボット教材を「micro:bit」によって制御する方法を学んだ。授業で学んだことの理解をさらに深めるため、教育プログラム「ロボメイツ」に参加し、小学生を対象としたプログラミング体験教室「ロボットアームを動かそう」を実施した報告があった（写真11）（発表要旨13頁）。

④「令和の時代の学びを実現するAL教室彦根モデルについて～自立して学び続ける学習者の育成をめざして～」

滋賀県彦根市教育委員会
学校ICT推進課 北川尚樹課長

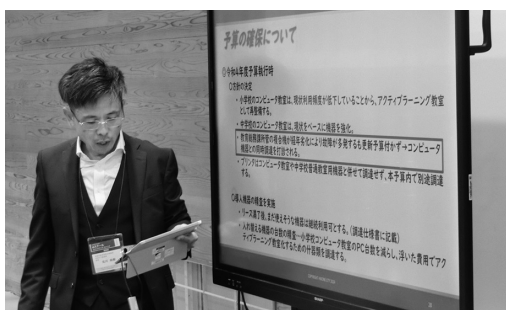


写真12・滋賀県彦根市教育委員会の発表



写真13・神戸市立長田南小学校の発表



写真14・神戸市立渚中学校の発表

彦根市では、令和2年度より市内小中学校PC教室を順次ALR（アクティブラーニングルーム）へと整備している。市内すべての小中学校のALR化が完了し、1人1台の学習者用端末とALRを効果的に活用することで、自立して学び続ける学習者の育成に向けて計画的に教育活動を展開している。ALRの活用についての児童アンケートでは80%以上が「普通教室よりも話し合いがしやすい、集中できる」と回答があり、各学校の実践事例や活用方法について研修や通信等により共有することで活用のスタンダード化を進めている。AIドリルや学習支援ソフトの活用は、児童生徒の学びの

充実につながるだけでなく、採点や学習履歴の把握など校務DX化にも大きく貢献することができたとの成果報告があった（写真12）（発表要旨14頁）。

⑤「小学校外国語×ALT×端末活用 ～言語活動の充実を目指して～」

神戸市立長田南小学校 中根一弥主幹教諭

神戸市では、小学校外国語の全授業にALTが配置されており、全授業協働授業を行っている。外国語教育では、言語活動を通した指導の充実をもっとも大切にしており、取り組みの重点に1人1台端末の活用を挙げている。取り組みの成果として、プレゼン録画については、自身の現状の力をメタ認知でき、アップデートするポイントを具体的に考えることができていた。また、モデル動画は、単語の発話だけではなく、子供が実際に話したい文を発話しているため、「そのまま真似もでき、自分の発話と比べることで目指すべき姿がわかり、よかった」と振り返られた。今後の展開として、小学校段階では言語活動が充実するための効果的な手段としての端末活用を今後も研究していきたいとまとめられた（写真13）（発表要旨15頁）。

⑥「マイコンボード教材（タコラッチ）を用いたプログラミング教育」

神戸市立渚中学校 福田遥平教諭

渚中学校は、創立時の時代背景から防災に力を入れており、未来の地域の防災を担うために、自ら学び、また地域の方々とのつながりを大切にしながら生徒が活動している。今回は、「D 情報の技術」の取り組みで、情報のデジタル化やネットワークの仕組みなど、情報に関する原理・法則と仕組みについての学習を踏まえた上で、体験的かつ実践的な学習の紹介があった。また、マイコンボード（タコラッチ）を用いた実践的かつ体験的なプログラミング学習を通して、自身の「あったらいいな」を実現する統合的な問題解決につなげたり、外部企業からの教材提供による授業展開にも取り組んでいる（写真14）（発表要旨16頁）。

次号では、デジタルポスターセッション（後半）、パネルディスカッションの様子を報告する。

eスクール ステップアップ・キャンプ 2024 神戸大会

報告（2）

園田学園女子大学教授 堀 田 博 史

1 大会概要

（一財）日本視聴覚教育協会・日本視聴覚教具連合会主催、文部科学省・神戸市教育委員会共催「eスクール ステップアップ・キャンプ 2024 神戸大会」が、2024年11月22日（金）・23日（土・祝）の2日間、神戸市立なぎさ小学校を会場に開催された。

大会テーマを「未来を切り拓くーNEXT GIGA時代の学びを探る」とし、対面で開催された。会場には約420名の参加者のもと盛大に行われた。今年度は、第73回近畿放送教育研究大会・第74回近畿学校視聴覚教育研究大会（兵庫大会）と同時開催として行われた。

前号では、文部科学省初等中等教育局寺島史朗学校情報基盤・教材課長の基調講演「GIGAスクール構想が拓く教育の未来」、そして神戸市の先生方の日頃の成果を発表されたデジタルポスターセッション（前半）を報告した。

今回は、デジタルポスターセッション（後半）とパネルディスカッションの様子を報告する。

2 デジタルポスターセッション2

セッションの持ち時間は15分間、その中で発表と活発な議論が行われた。

本稿では後半6件の発表を紹介する（本報告に続き、発表要旨も掲載）。

以下の報告は、配布資料より抜粋、編集したものである。



写真1・神戸市立灘さくら支援学校の発表

⑦「タブレット端末とパワーポイント教材の活用」

神戸市立灘さくら支援学校 佐和将圭教諭

本校は、開校4年目の新設校で、市立灘の浜小学校在併設されている。GIGA端末としてiPadが配当され、TeamsやSKYMENUを使った集団学習や無償アプリを使った学習を行っている。また、児童生徒の実態に応じて視線入力装置（Tobii アイトラッカー）や床面投影機（ワイズフロアゴー）も活用している。

発表では、知的障害部門におけるタブレット端末を活用した授業実践を紹介された。タブレット端末を使って一人一人がクイズに取り組むことで、それぞれが、自分のペースで楽しみながら反復練習を行う時間を十分に確保することができる。

その結果、学習が定着し、集団での学習の場面でも意欲的に前に出て発表しようとする生徒が増えてきたとその成果を振り返られた（写真1）（発表要旨55頁）。

⑧「教育の本質を探究し続けるGIGAしこちゅ〜プロジェクト」



写真2・四国中央市教育委員会の発表



写真3・神戸市立山田小学校の発表

愛媛県四国中央市教育委員会教育指導部

学校政策課 馬越博之課長補佐

市のICT教育を推進するため「GIGAしこちゅ〜」プロジェクトに取り組み、大学やIT企業と連携している。

授業事例を発信するポータルサイト「GIGA×CHU!」を立ち上げ、多くの教職員が活用している。教職員が1人1台端末を効果的に活用するための「教職員研修プログラム」や、児童生徒が自ら学びを深める「チャレンジプログラム」を実施し、市全体でのスキル向上に努めてきた。

その結果、小学校低学年の「楽しい授業」から、中学生の「できる授業」へと活用が進んでいる様子が見られた。今後、教育DXの推進「教育データの利活用」「校務のゼロトラスト化」など、多様化する児童生徒への学びの充実を図る予定であると締めくくられた（写真2）（発表要旨56頁）。

⑨「ドローンプログラミングを通して『チイキのミライ』を考える」

神戸市立山田小学校 柘植裕貴教諭

本校は、全校児童65名の小規模校である。魅力ある学校づくりのために、神戸市教育委員会、行政、地域住民、保護者等と協働し、「アクティブな協働学習」「実践的なキャリア教育」「個別最適化指導」を三つの柱とした「チイキ×ミライツクル・スクール」構想の下、学校の特色化を進めてきた。

プログラミング教育年間計画に、ドローンを使ったプログラミング教育を位置づけた。事前の意識調査では、児童のドローンに対するイメージは「空飛ぶ機械」や「ラジコンみたいなもの」と

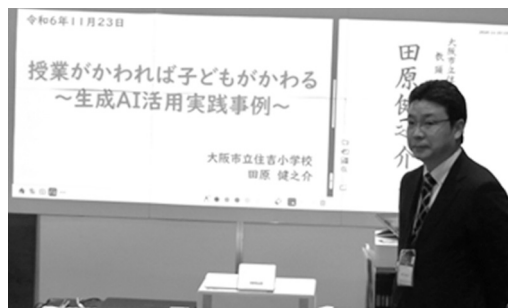


写真4・大阪市立住吉小学校の発表

いう結果だったが、事後は「生活を変えてくれるもの」や「便利な（働きをしてくれる）もの」等と変化が見られた。プログラミング的思考を育むだけでなく、どうすればさまざまな先端技術を取り入れながら、「チイキのミライ」をよりよく発展させていけるのかを考える第一歩となったと振り返られた（写真3）（発表要旨57頁）。

⑩「授業がかわれば子どもがかわる〜生成AI活用実践事例〜」

大阪市立住吉小学校 田原健之介教頭

本校は、昨年度リーディングDXスクール事業の選定を受け、児童は毎日端末を持ち帰り、クラウドを活用した学習を行っている。

また、本年度は大阪市教育委員会の生成AI活用実践パイロット校の指定を受け、コニカミノルタ社のtomoLinksやマイクロソフト社のCopilotを児童が活用する実践を進めている。

当初、児童は生成AIの回答をうのみにするのではないかと心配があったが、活用後の児童からは、「自分の考えにヒントをくれるし、意見をまとめるのを助けてくれる」「自分が考えもつかなかった方法を教えてくれるし、AIと会話しながら



写真5・大阪府立すなわ高等支援学校の発表



写真6・兵庫教育大学附属小学校の発表

勉強するのがたのしい」「AIにアドバイスしてもらって、発表のしかたを変えました」などの感想があり、生成AIを児童自らが活用することで授業スタイルは変わり、児童の思考にも変化を感じると報告があった（前頁写真4）（発表要旨58頁）。

⑪「ゲーム制作を通じた問題解決能力の育成」

大阪府立すなわ高等支援学校 沼丸侑磨教諭

本校は、職業学科を設置する高等部単独の特別支援学校で、100名程度の知的障がいのある生徒たちが就労を通じた社会的自立を目標に学んでいる。

発表では、情報科のゲーム制作を通じて問題解決能力の向上を図るプログラミング学習の事例を報告した。授業後の生徒の様子を観察すると、はじめは操作に戸惑っていたり、問題に対して不安を感じたりする場面も見られたが、繰り返し取り組むうちに、自信を持って機器を使うことができていた。

生徒たちからは「今度はパソコンでゲームを作りたい」という感想が寄せられ、失敗を恐れずに挑戦する姿勢が少しずつ身についてきていることがうかがえた。また、問題に直面したときに原因を考え、解決しようとする姿勢が見られた。さらに、「友達と協力して解決策を見つけるのが楽しい」とも言っており、これが協力の重要性を理解する手助けにもなっていると感じたと実践の成果を述べられた（写真5）（発表要旨59頁）。

⑫「おもちゃ作りを題材にデザイン思考を働かせるSTEAM教育の実践～小学校第2学年における事例～」

兵庫教育大学附属小学校 林 孝茂教諭

教員養成フラッグシップ大学の指定を受けた大学附属小学校として、自らの意思を持って未来を切り開いていく「人間として生き抜く力」を目標に掲げた教育を行っている。

発表では、生活科「せかいでひとつわたしのおもちゃ」を中心に、近隣こども園の園児が抱えている「小学校のことがわからなくて不安」という困りごとに対して、学習や学校生活をテーマにした「おもちゃ」を作り、共に遊ぶことで解決を図るSTEAM単位としてJ-STEAMの学習モデルに沿って構成した。

実際に園児の困りごとを解決した児童の反応には、「数字を覚えてくれてうれしい」や「立派な1年生になってください」といった肯定的な言葉が多数あり、達成感を感じている様子がうかがえた。

その教科学習の成果を次のSTEAM単元の準備学習として位置づけを更新することで、学びの循環が生み出されることが期待されるとまとめられた（写真6）（発表要旨60頁）。

3 パネルディスカッション

教育長鼎談「教育長に聞く！ー未来を切り拓くNEXT GIGA時代の学びをどう進めるかー」と題したパネルディスカッションが、コーディネーターを園田学園女子大学の堀田が務め、オブザーバーを文部科学省初等中等教育局 寺島史朗学校情報基盤・教材課長として、神戸市教育委員会 福本靖教育長、徳島県教育委員会 中川斉史教育長、



写真7・
上段左から、筆者、寺島課長、福本教育長、
下段左から、中川教育長、藤迫教育長

大阪府箕面市教育委員会 藤迫稔教育長らをパネリストに迎え、行われた（写真7・次頁写真8）。

1巡目は、GIGAスクール構想推進における各自治体の「今」について、2巡目は、セカンドGIGAに向けて大切にしたいこと「これから」について語っていただいた。

神戸市教育委員会 福本靖教育長からは、神戸市の授業の現状として、コロナ禍で情報端末の活用に教員格差があったが、学習用パソコンを週3日以上使うと回答した児童生徒の割合が、令和5年7月の調査から令和6年6月の調査では、小・中学校とともに約30ポイントずつ上昇しており、1人で学ぶ、仲間と学ぶ、教師と学ぶことを児童生徒が選択できる授業形態が取り入れられてきていると述べられた。

続いて、徳島県教育委員会 中川斉史教育長からは、令和6年度の徳島県推進目標「教育DXによる学び・指導の充実と深化」では、徳島ICT活用モデル（SAMRモデル）をもとに、A段階以上の実施率100%を目指している。また、学びたくなる環境を整備した「私立神山まるごと高専」の例をはじめ、徳島県内の高等学校10校が取り組んでいるDXハイスクールでは、動作解析やチームスポーツの戦術分析など、デジタル等成長分野を

支える人材育成の強化に努めていると現状のお話があった。

箕面市教育委員会 藤迫稔教育長からは、箕面市は、平成22年度よりフューチャースクール推進授業、続けて学びのイノベーション事業に参加し、情報端末の効果的な活用法を研究してきた。情報端末を上手に使いこなすために、教員に情報端末を使いなさいではなく、使いたくなるような授業支援に力を入れている。また、最先端技術及び教育データ利活用に関する実証事業では、学力調査のAI分析をダッシュボードとして活用、学力と学習意欲を向上させることに取り組んでいるとお話があった。

後半は、次頁図の内容をテーマに、セカンドGIGAに向けて大切にしたいこと「これから」について鼎談が続いた。

福本教育長は、「使う・使わない」の段階～教師の視点～を選ばれ、NXET GIGAでは授業でICT活用が日常的にならないといけない。そのために、教育委員会が何をすべきかを明確に進めないといけないと語られた。

中川教育長は、「標準化と自由化」として、特に小・中学校の先生方は4月に異動がある。授業でのICT活用が普通にならなければいけない一方で、

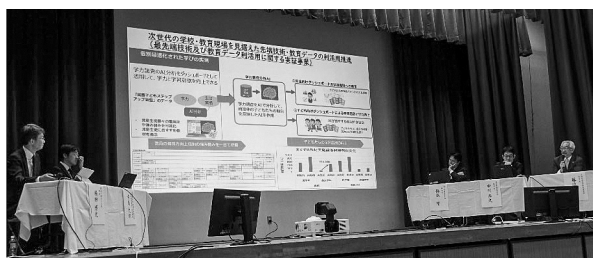


写真8・会場の様子



図・セカンドGIGAに向けて大切にしたいこと

標準化 と 自由化	「使う・使わない」 の段階 ～教師の視点～	「えんぴつ・ 筆箱・ タブレット」から 「スマホ」へ！
セキュリティ 対策との戦い	共有の 拡大	使って 当たり前 ～子供の利益～

アプリやポリシー、運用ルールなどの違いに混乱することがある。そのために、標準化する部分と自由に選択できる部分を明確にしておかないといけない」と述べられた。

藤迫教育長は、「えんぴつ・筆箱・タブレット」から「スマホ」へ！を選ばれ、平成30年に箕面市で小学4年生から1人1台の情報端末を配置する時に、議会からどのような効果を期待しているのかと質問があった。市長と教育長の見解は、子供たちはいずれ社会に出ていく。その社会と学校の環境に差があるのではなく同じにすることが大切と回答したと当時を振り返られた。

今後は、GIGAスクール構想の整備が進む中、子供のために使う、子供たちにとって便利、効果がある、という情報発信と教師間の化学反応が起こることに期待していると述べられた。

オブザーバーの寺島課長は、授業でICTを使うことを目的にするのではなく、児童生徒に教科の資質・能力を身に付けるために、ICTをどう活用するのかがポイントである。

NEXT GIGAでは、GIGA×教科が大きなテーマとなり、その事例を共有していくことが大切であると締めくくられた。

4 今後の展開・展望

以上で、「eスクール ステップアップ・キャンプ 2024 神戸大会」の報告を終える。

本大会は、第73回近畿放送教育研究大会・第74回近畿学校視聴覚教育研究大会（兵庫大会）と同時に開催された。

兵庫県、そして神戸市の先生方には、デジタルポスターセッションでの事例紹介をはじめ、KOBEX GIGA フェストと題した保護者向けイベントも催された。

パネルディスカッションには、神戸市、徳島県、箕面市のICT先進地域の教育長にご登壇をいただいたことに、感謝を申し上げたい。

また、協力企業の皆様には、「教育ICT教材・機材ご紹介」と題して、先進的な教材・教具のご紹介をいただき、大会の運営、そして成功にご尽力いただいた。重ねて御礼申し上げたい。

今大会は、GIGAスクール構想の次なるステージ「NEXT GIGA」に向けた新たな教育の可能性を探究した。デジタルコンテンツや放送番組の活用も踏まえ、ICTの活用事例等を通して、教育データの利活用や個別最適な学び、授業改善など、「NEXT GIGA」における検討事項や課題、具体的な取り組みを紹介し、参加者と共に未来志向の学校・学びを考えることができ、参加者の皆様に大変有意義な機会となったのではないだろうか。

結びに、今大会はGIGAスクール構想のICT環境整備、教育データの活用等に興味・関心がある教育関係者が集まり、学び合える機会となったに違いない。来年度も本キャンプが開催されることを願う。